

二つの北高

24期 徳田完二

私にとって北高は二つある。なぜなら、私は西川津校舎と赤山校舎の両方に「いた」ことがあるからである。と言っても、北高在籍中に校舎が移転したというのではない。私は24期なので、北高に在籍したのは昭和45～47（1970～1972）年度、つまり西川津校舎の時代だった。しかし、私は大学生のとき北高で教育実習をさせていただいたし、同じ年の別の時期に卒論のための調査をさせていただいた。それは北高が赤山校舎に移転した直後だったので、その校舎にも少しだけ「いた」というわけである。

教育実習は昭和53（1978）年、大学四年生の時だった（これは私の北高在籍年度から数えると計算が合わない。それは私が「道草」を食い、二浪と同じ歳で大学に入ったためである）。教育実習はいつのことだったのか。それがふと気になって、昔々の手帳を探し出して確かめたところ（私は北高の「生徒手帳」以降の手帳をすべて保管している）、6月1日（木）～6月14日（水）の二週間だったとわかった。ちなみに、私は教員志望だったのではなく、教員免許の取得は将来食いはぐれないための「保険」のつもりだった。

教育実習の授業は二年生の古文をやらせていただいた。担当したのは『大鏡』の単位だったと思う。授業案を作る参考に教員用の「虎の巻」を貸していただいたのだが、そこには各単元で教えるべきポイントが残らず解説してあった。高校時代に受けた授業でも、先生方がこれを使っていたのかと思い、ちょっと拍子抜けした覚えがある。

同じ時期の実習生が四人いた。その一人は、高校の学年が一つ下の、補習科で一緒だったF君である。彼とは大学も同じで、国語科同士だったのが心強かった。自分の授業について教員から嫌みを言われたあとは、二人で不平不満を言い合い、憂さを晴らしたものだ。教育実習最終日の夜は、補習科時代にお世話になったM先生たちから飲みを誘っていただいた。

教育実習が終わったあと、私は卒論に取り組むことになった。高校生が対象の調査研究だったので、京都市内の高校での調査を市教委関係者にお願いしてみた。ところが、長いこと返事を待たされた挙句に断られてしまったのである。困った私は、藁をも掴む思いで、先のM先生に電話した。即答でOKが得られた。助かった。母校のありがたさをつくづく感じた。ちなみに、調査をさせていただいたのは二年生の数クラスである。

卒論のための調査をしたのがいつだったのかがふと気になり、その年の手帳を見たが書いてなかった。晩秋だったはずである。当時、山陰線には京都駅と出雲駅を結ぶ夜行の鈍行列車が走っていた。鈍行なのに名前があるその列車は「おき」だった。松江に向かう時、日暮れ前の列車の窓から、だいぶ葉は落ちたものの鮮やかな黄色に彩られた雨上がりの樹々が見えたのを覚えている。調査前日の夕方から一晩かけて松江に行き、調査が済むと再び鈍行夜行列車「おき」で京都に帰るといふ強行軍だった。

なにはともあれ、北高がなかったら私は卒論が書けず、その年度に卒業できなかったと思う。卒論は何年も経ってから加筆修正して『心理学研究』という学会誌に投稿し、掲載された。昭和 62 (1987) 年のことだった。それは「青年期における自己評価と両親の養育態度」というタイトルで、いわば私の「デビュー作」である。ちなみに、このタイトルで検索すればネットで閲覧できる。

この文章を書きながら、教育実習の時に私のつたない授業を受け、卒論の調査に回答してくれたのは何期生だったのかが気になり、計算してみた。31 期生だとわかった。31 期生のみなさん、その節はお世話になりました。

連載ミニエッセイ 2

田口先生のこと

北高で教わった先生の中でいちばん印象に残っているのは国語科の田口意彦先生である。田口先生という、授業の面白い先生がいるという話を耳にしたのは、二年生の時だったと思う。その後、田口先生が定期試験の監督に来られた時、初めてお顔を拝見した。しかし、その時の先生はムスッとした感じで気難しそうに見えたので、面白い先生だという噂はほんとうだろうか、ちょっと疑わしい気がした。

三年生の時、現国の担当が田口先生になった。噂にたがわず面白い授業をされた。ジョークをたくさん飛ばして笑わせるタイプではなく、ときどき話が脱線するのだった。どんな脱線をされたのか詳しくは覚えていないが、話が面白かったという印象ははっきり残っている。現国の教科書にも出てくるような文芸評論家の息子と大学の同級生だった話や、ある女性タレント議員と知り合いだった話があったと思う。脱線から話を戻す時の決まり文句こうだった。「まあ、こんなことは試験に出ないんだが」

しかし、私にとって田口先生の授業で最も印象深かったのは、教科書の文章を、筋道を立てて鮮やかに分析して見せる教え方だった。その授業を受けて初めて、よく考えて書かれた文章は隅々まで緻密に組み立てられているのだと思い知った。先生がその組み立てのありようを黒板に書き進めていくのを見ていると、頭の中がすっきり整理され、今までより少し頭がよくなったような気がしたものである。それは心地よい体験だった。ただ、授業とは別に自分一人で何かの文章を読んでも、先生のように分析することはできなかったから、頭がよくなったような気がしたのは、授業を受けている時だけの錯覚に過ぎなかったのだけれど。

とは言え、優れた文章はちょっとした言葉の使い方も含めてよくよく考え抜かれているのだという認識を持てたのは、私にとって大きなことだった。その後、私は自分でも文章を書き、人の書いた文章を評価し、また学生に文章を書く指導をするのが仕事の一部になった。そういう仕事の基礎の部分を作ってくださったのが田口先生だと思う。

私は北高を出てある大学に入ったあと、そこを休学して再受験のため北高に「出戻り」した（つまり補習科に入った）のだが、その時の文系クラスの担任が田口先生だった。

先生はときどき夜のご自宅に補習科の生徒を何人か集めて「授業」をされた。先生は教えることが好きだったのだろうし、補習科の生徒を次の受験ではなんとか合格させたいというお気持ちがあったのだろう。教材は大学の入試問題を輪転機で刷ったもので、「授業」は二階部屋の炬燵で行われた。それが終わると、先生はよく私たちを前にしてお酒を飲み、上機嫌でお話をされた。広げて干した乾燥ワカメを軽く炙ったのを奥様に持ってこさせ、それをパリパリ噛みながら、「わしはこげなもんが好きでなあ」と、照れたようにおっしゃっていたのが印象に残っている。

補習科を経て、私はさいわい志望校に合格できた。その時、将来は研究の道に進みたいという漠然とした希望を田口先生にもらしていたのだろう、大学一年生の時、先生からおよそ次のような内容の葉書をいただいた。

“友人の上田正昭君（日本古代史の研究で有名だった京大教授で、田口先生のご友人）の講演が松江であった。上田君を松江駅まで送ったタクシーの中で「教え子が研究者を目指しているようなのだが」という話をしてみたら、「大学院に進めば何とかなるのではないか」と言っていた”

その葉書に勇気づけられたことが、大学院進学につながった面がある。私が研究者になれたことについて、何パーセントかは田口先生のおかげだと思っている。